

諸報告へのコメント（その1）

和田 春樹



御報告はみな非常に多岐に渡っておりましてので、それについて丁寧にコメントさせていただくこともできません。粗いコメントになるかと思いますが、お許しいただきたいと思います。

フィリモノヴァ先生のご報告は、最近のロシア学界の研究を紹介されて、基本的に戦争のはじまるまでのプロセスについて、代表的な共通見解をお話しになりました。先生が中心的にご紹介になった本はモスクワ大学のアイラペトフの編で出た日ロ戦争の論文集で、代表的な研究書です。もう1人、先生と同じペテルブルグの歴史研究所に勤めておられるイーゴリ・ルコヤノフが、ベゾブラゾフ派について研究をなさっておられ、本年日本の2箇所で開催された日ロ戦争100年の国際シンポジウムにおいてご報告になっています。現在、ロシアでは最も深く研究をなさっておられる新進の方です。

しかしながら、率直に申しまして、戦争がはじまるプロセスについての研究は、ロシアにおいてもまだまだ深まっていないように見えています。われわれの持っているイメージは、多くの場合に既成のイメージにとらわれているわけです。今日、フィリモノヴァ先生が報告書の6ページで、「無制限専制が政府と自らのとりまきの最も好戦的な気分に傾いた部分の忠告にしたがって、小さな勝ち戦（プレーヴェ）を行うことを決定した」とおまとめになっておられます。このまとめは広く存在している見方ですが、これはヴィッテの回想録に述べられている見方です。日本では司馬遼太郎さんの本にも、この考え方が出ているわけです。私はこの考え方は、資料的に見ると正しくないと思っています。その点サルキーソフさんが非常に強調されましたように、「皇帝は戦争を回避したかったのだ」ということです。実のところ当時のロシアの指導部は皇帝と大臣たちですが、ヴィッテたちのグループ、それからベゾブラゾフのグループ、いずれも戦争を回避したいと思っていました。戦争をここでやろうと思っている者はロシアにはいなかったのです。ベゾブラゾフのグループ自体が非常に好戦的なグループだと言われていますが、研究するとそうではないということが分かります。

ここで小さな勝ち戦（プレーヴェ）という内務大臣が申した有名な言葉ですが、私も書いていますし、どの歴史家もこの言葉を引用しています。つまりロシアでは革命が迫っているのだから、革命を避けるためにはどこかで小さな勝った戦争をやらなければならないということを、治安を担当している大臣のプレーヴェが申したというわけです。これはヴィッテの嘘かクロパトキンの嘘か、そのいずれかだと思います。ヴィッテはクロパトキンがそう言っているという引用していますが、プレーヴェはすでにキャリアを積んだ警察官僚で、そんな戦争をしてロシアの革命を防げるなどとは

毛頭思っていませんし、彼の大臣協議会での発言を見ると、戦争を回避するということに執着しています。ですからこれはヴィッテの嘘だと思います。

さて、そのご説明の後にフィリモノヴァ先生は19世紀末の参謀総長オーブルチェフの意見書をご紹介になりました。これは、このアイラペトフの本に載っているものですが、カシーリンという若い研究者が発掘しました。日清戦争の最中に書かれた非常に重要な資料です。この資料が述べているのは次のような考えです。日本との戦争を回避しないとイケない。日本と戦争をするようなことになってはならない。したがってロシアとしてはロシアの地政学的な状況を改善するために、満州北部と朝鮮の北の方の一部を占領する。そしてロシアの極東地域を安定させる。その代わり満州南部、遼東半島は全て日本に認めるということです。朝鮮も日本に認めるということです。こういうのがオーブルチェフの案で、先生はこれをご紹介になりました。

しかし、この案はすぐに否定されたわけです。三国干渉になって、日本がとった遼東半島を還付させた後で、98年にはロシアがそれをとってしまうということになり、南満州鉄道もヴィッテが引くということになりますから、オーブルチェフ構想を全く否定するようなことになり、抜きがたい対立が日本とロシアの間に生じたところで戦争が迫ってくるということになりました。1903年11月にクロバトキン陸軍大臣がオーブルチェフと似たような案を出すわけです。つまり満州から撤兵して北部満州だけを併合するということです。そして南満州を明け渡し、遼東半島、旅順、大連は中国に還付するという案を出して、これによって日本と妥協を図って、戦争を回避するという案です。しかし戦争目前にして旅順防衛にお金を注ぎ込んで、第一線の要塞を固め上げているところで、陸軍大臣がそんな学者みたいなことを言って通るはずがありません。ですからその点はクロバトキンは駄目だと思っています。もちろん皇帝はそれを拒否です。そういうふうには話がすっといけば、妥協は成立したのかもしれませんが、日清戦争が終わった後には、それに近いようなものが実現したのかもしれませんが。でもこのオーブルチェフの意見書というのは非常に興味深いもので、先生からご紹介いただいたことはありがたいことだったと思います。

さて2番目のソク・ファジョン先生のご報告ですが、非常に興味深い資料のご紹介があったと思います。本日御出席のミハイロヴァさんが漫画というものに注目して、ロシアの日本イメージをずっとご研究になっておられましたが、今回、ソク先生がご紹介になったのは欧米の見方で、国際社会がこの対立をどういうふうに見ているかということについて、新しい資料をご紹介になったところに価値があると思います。

ただ、伺っていて思いましたのは、非常に多目的でこの報告をなさっておられ、この中にいろんな目的をこめていらっしゃるの、分析としてはどういうふうになるのかというのが少し問題です。つまりイメージの分析ということであれば、最後におまとめになった、つまり猿が女になって、その次は男になるというように、日本のイメージが変わってきたということも非常に面白いことです。そういうようなところに絞って、この問題を出していけるとすれば、これは1つのお仕事ですが、先生のご研究である日清関係史のご研究も、この中で開陳されようとしていますので、そのところを、もう少し整理する必要があるのではないかと感じた次第です。私にとって一番印象的であったのは、「大韓帝国最後の絶叫」、局外中立宣言を出した老人の朝鮮を日本とロシアが引っ張っている図です。

こういう絵の世界において、日本は猿からいろいろ変化していますが、朝鮮はどういうふうに描かれているのかということも、ちょっと気になります。ここでは朝鮮は老人だとして同情的に描かれているのですが、その後変化があるのでしょうか。先生の解説についてひと言ふた言申したいと思います。

ソク先生はここで、日口交渉がどういうものであるかということについて述べておられます。日本側がどういう要求をしたか、他方ロシアも「韓国の独立の保障というものは、日本の韓国完全掌握を阻止することによって、韓国を完全には放棄しないという意思の顕れであった」と述べておられます。つまり日本もロシアも共に帝国主義国であって、朝鮮を支配したいと願っていたのであるということです。それが、綱引きの両方から引いているという形の現れになっているのだろーと思ひます。それはよく分かります。ロシアもそういう帝国主義的な野心を持っていました。しかし日口交渉については、日本側はロシアに対して大韓帝国を日本の保護国にするという考え方を持っており、それをロシアが条約的に認めるということを日口交渉で要求し、もしロシアがそれを条約的に認めないのであれば、戦争をするという考えでした。戦争してこれをロシアに認めさせる。戦争をするのは現在が最も有利な状況だという判断が桂と小村にあって進めた交渉であると私は見ています。それに対してロシア側はどういう反応をしたかということですが、ロシア側ではそのような状態になること、つまりロシアが認めて日本が朝鮮を保護国化するという事態を回避しようと考えていたことは明らかです。もし日本がそうしたいのなら、ロシアの承認なしに日本はそれをすべきだということです。日本はそれをしたらロシアは抗議するが、軍事的な行動は起こさないというのが、ロシアの基本的な態度であったというふうに見ています。

さらに韓国の高宗皇帝から再三にわたってロシアの皇帝に対して、支援してくれるように求めている、特使も数次にわたって派遣されています。その点でちょっと申します。大韓帝国の中立宣言というものが出るのでありますが、この中立宣言は実はソウルに駐在していたロシアの大使パヴロフが密かに預かり、ドイツの巡洋艦ハンザの艦長に預けて、それを持ち出してもらい、旅順経由でフランスの領事に渡したとなっています。表向きは皇帝の特使が持ち出したことになっていますが、実はロシアの大使が依頼を受けて進めています。この中立宣言がロシアに届いたわけですが、大韓帝国のロシア駐在大使はこれをロシア外務大臣に渡す決断がつかないという電報がのこっています。要するに皇帝高宗は、戦争になった時は必ずロシア側に味方するというふうに、ロシアの皇帝に対して信書を以前に送っているからです。つまり中立ということになると、戦争になったらロシア側につくと言っていたのに、それを裏切るようなことになってしまうということで、大韓帝国の大使は中立宣言を渡せないという手紙を本国に戻ってきています。そういう事情だけでも私の本心は変わらない、「中立宣言と言っているが、実は戦争になったらあなたの方を味方するのだ」ということを大韓帝国の皇帝高宗はパヴロフ大使に伝えており、パヴロフはそれをアレクセーエフに伝えてあります。アレクセーエフはもちろん彼も帝国主義者ですが、やはり韓国の状況に対して同情心を持っていると私は思ひます。そういうことがあります。

第3に、プレハーノフについて、お2人の先生からお話がありました。日口戦争の最中の日口の社会主義者の連帯、幸徳たちの手紙のやり取り、そしてプレハーノフと片山の握手は非常に麗しいもので、時代をこえて希望を与える光景であると考えてきました。私は中学生の時に、幸徳秋水の

「露国社会党に与ふる書」を読み、非常に感動したのです。私が平和ということを考える最初のきっかけになったもので、これは非常に自分にとっても重要なものであると思っています。しかしながら、ここにはもう1つの問題があります。それは坂本さんがお出しになった点です。敗戦主義と国際連帯というものの矛盾という問題が存在するのです。日本とロシアの社会主義者はお互いに戦争に反対して、手をとっていこうという気持ちと、ロシアの革命家にとっては皇帝の政府が戦争に負けた方が革命にとって有利であるという考え方があって、プレハーノフはそこに引き裂かれているわけです。この点、坂本さんの方はプレハーノフの個人の問題としてお出しになりましたが、これはフィリモノヴァさんのご報告の中にあるように、ロシアの社会主義者の中に2派あったわけです。ツァリーズムの敗北を望む派と、平和を望む派と2つあったわけです。平和を望むという派はマルトフによって代表されています。マルトフは次のように言っています。「ロシアが満州を自分のものにして、満州を文明開化することに対して、われわれは憤りを禁じえない。しかしブルジョア日本が朝鮮を自分のものにして、朝鮮を文明開化するというようなことにもわれわれは賛成できない。したがってわれわれは帝国ロシアの勝利も願わないが、ブルジョア日本の勝利も願わない。われわれはいかなる意味でも親日主義には立たない、われわれのスローガンは戦争反対だ」。このマルトフの精神は、ほとんど幸徳秋水の精神と一致しているわけです。逆の方向にレーニンがいます。レーニンはご承知の通り旅順が陥落した時に、「ツァリーズムの敗北だ」と申しまして、同時にこれは日本のブルジョアジーが革命的役割を演じているのであると、率直に言うと手放しに日本を評価しました。ですから、マルトフとレーニンの争いという対立の間にプレハーノフがいるわけです。

プレハーノフも実は、坂本さんご紹介になったアムステルダム大会の片山潜の発言の後に彼は、「ロシアは文明の敵である」と言っています。そこは坂本さんが省略になった点です。日本では吉野作造まで「ロシアは文明の敵である、だから日本が戦争をして勝つのだ」と、日ロ戦争を肯定しているわけで、これとはほとんど差がないという状況に社会主義者は置かれています。プレハーノフがそこでかろうじて持ち出した議論が、坂本さんご紹介になった「最小の悪」という議論です。要するに2つの悪があって、「ロシアが勝つ悪」と、「日本が勝つ悪」と、どちらがより小なる悪かという、日本が勝つ方が悪ではあるが、より小であるということで、これを選択するといったところにプレハーノフがかろうじて踏みとどまっているところがあるのではないかと思います。これがレーニンとプレハーノフの違いだと思います。

繰り返して申しませんが、幸徳たちは旅順が陥落した時も絶望的な言葉を書いているわけです。そして彼はご承知の通り、「地図の上 朝鮮国に黒々と 墨を塗りつつ秋風を聞く」という有名な歌を書きました。朝鮮併合に対してきっぱりと反対したのは、幸徳たちでした。その幸徳が朝鮮の併合の年に、大逆事件に捕らわれて絞首刑になって殺されていくというふうに抵抗したわけで、このことはやはり意味のあることであったと私は思っています。

最後のサルキーノフ先生のご報告は、長い時間話されましたがとてもコメントできません。日ロ戦争の部分について、ひとこと申させていただきます。皇帝が戦争を回避しようとしていた。そして「朝鮮を併合するということはよい」というふうに受け入れると言っていたと言っておられます。実は先ほど申しましたが、当時ロシア側では、日本にいた駐在武官も、ロシア側の要人たちも、み

んな交渉が決裂すれば、日本は宣戦布告なしに朝鮮に出兵して朝鮮を占領するであろうと見ており、朝鮮への出兵がどこまでだったらロシアは黙って見ていることができるかというふうに考えていました。まかり間違っても宣戦布告なしに旅順を攻撃してくるとは思っていないのです。アレクセーエフもそうは思っていないし、皇帝も思いません。皇帝はアレクセーエフにどこまでならいいという電報を何度か送っていますが、結局、最後にアレクセーエフに対して皇帝は、「仁川に入ってきたら攻撃しろ」と命じています。しかしこの電報が届いた時には戦争がはじまっていたのです。結局、サルキーソフさんがおっしゃったように、ニコライは徹頭徹尾決断力のない皇帝でした。だから結局、何も決められなかったというのが正しいと思います。以上です。

(わだ・はるき 東京大学名誉教授)

●旧日本租界の実態を究明した、初めての本格的な研究書
大里浩秋・孫安石編著（神奈川大学文学部研究員）AS:五〇〇頁・八一九〇円（税別）
重慶・漢口・杭州・上海

中国における日本租界

第一部 長江流域の日本租界
長江上流の影薄き夢の跡——重慶租界——
漢口の都市発展と日本租界——
杭州日本租界のたどった道——
浙江文化研究の初探——
日本が上海に租界をつくることとした件——
西洋上海と日本人居留社会——
第二部 租界の建築と都市計画
中国における各国租界の特色——
近代租界の欧米建築の文化遺産について——
上海近代の都市計画の歴史とそのパラダイム研究——李百浩・郭建・黃亜平（孫安石訳）
漢口租界の都市と建築——
漢口日本租界の都市空間史——
第三部 資料編
重慶日本租界関連資料——
漢口日本租界関連資料——
杭州日本租界関連資料——
大里浩秋 田畑光永 孫安石 富井正憲

●日中戦争、太平洋戦争史の基本文庫／30年ぶりの増補版発行
小林英夫著 AS:判六二二頁・七二四〇円（税別）
増補版「大東亜共栄圏」の形成と崩壊
日本の植民地支配政策の展開と崩壊過程を「総力戦体制構築」との関連で歴史的にあらわす。書評に答える「大東亜共栄圏（再論）」と40年間の研究成果である発表論文目録を収録。
●世界地図はいかなる未来像を描くか
野村真理・弁納才一編 菊判二四〇頁・六三〇〇円（税別）
地域統合と人的移動 ヨーロッパと東アジアの歴史・現状・展望

第一部 ヨーロッパ
近現代ヨーロッパにおける地域統合と人的移動——中島健一・野村真理
フランスにおけるイタリア人移民の統合——
EUにおける人の移動——
欧州建設・拡大の社会的次元——社会的欧州をめぐる動向——
第二部 東アジア
近現代東アジアにおける地域統合と人的移動——
朝鮮民族の人的移動に関する歴史的考察——
山東省における労働力移動——満洲方面を中心に——
近代日中間における日本の言語政策——
植民地朝鮮における日本の言語政策——
近代日中間における経済関係の深化と対立——
第三部 資料編
N A F T Aとビートの移動——
小内山園 弁納才一 櫻井公一 小内山園 弁納才一 櫻井公一

御茶の水書房 〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20 電話03-5684-0751
ホームページhttp://www.ochanomizushobo.co.jp/